

「天からのパン」 井上隆晶牧師

出エジプト 16 章 15～22 節、ヨハネ福音書 6 章 48～56 節

①【天からのパンであるマナ】

イスラエルの民は、荒野に入るとモーセに向かって不平を言いました。「エジプトでは肉がたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べることができた。今は飢え死にしそうだ。これならエジプトで死んだ方がましだった。」神様は、彼らの不平を聞き、夕方にはうずらを与え、朝には天からパンを与えてイスラエルの民を満腹にさせました。朝、宿営の周りに露が降り、それが蒸発すると、薄くて壊れやすいものが残っていました。それはコエンドロ（コリアンダー）の種に似て白く、密の入ったウェファースのような味がしました。民はそれをマナと名付けました。モーセは民に「**あなたがたはそれぞれ必要な分、つまり、一人当たり一オメルを集めよ。**」（出エジプト 16：16）と命じました。一オメルは 2.3 リットルです。ある者は多く集め、ある者は少なく集めましたが、升で量ると、多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、それぞれが必要な分を集めました。モーセが「**誰もそれを翌朝まで残しておいてはならない**」（出エジプト 16：19）と命じましたが、残しておく者もいました。しかし虫がついて臭くなりそれは食べれませんでした。日が高くなるとそれは溶けてしまったので、民は朝ごとにマナを集めなければなりませんでした。六日目は、いつもの二倍を集めることができ、次の朝まで残しておいても虫がつかず、臭くなりませんでした。六日に集めたものだけが虫がつかないというのは不思議ですね。七日目は安息日だったので、野にはマナは降らなかったからです。**神様は安息日に礼拝を守る者には、二日分のパンを与え、必ず食べていけるようにしてくださる、ということなのです。安息日に労働しても何も得ることはできないということを教えているのです。**

②【イエス様こそ天からのパンであること】

さてイエス様は荒れ野で五つのパンと二匹の魚で五千人以上の群衆を養うという奇跡を行いました。パンの奇跡を体験した群衆たちはイエス様を追いかけてきます。イエス様についていけば食べ物で困ることはないと思ったからです。そんな群衆にイエス様は「**朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい**」（ヨハネ 6：27）と言われます。この永遠の命に至る食べ物というのがイエス様ご本人の事なのです。

●多くの人は教会に何を求めて来るのでしょうか。日々の平和、生きてゆくための衣食住、病気の癒しと健康、心の安らぎでしょうか。これらはすべてこの世のものです。これらのものが手に入らなかつたら人はそれでも教会に来るのでしょうか。カルトから 10 人が脱会しても、神を求めて教会に通うようになる人はその

うち1人だけです。後の9人は教会に来ません。イエス・キリストを知りたい、イエス・キリストに出会いたいという心で来ている人がどれほどいるでしょう。

群衆は、先祖が荒野でマナを食べたように、私たちにも天からのパンを降らせてください、といいます。するとイエス様は、「私は天から降ってきたパンである」(6:41)と言い、「私は命のパンである。あなたたちの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。しかしこれは天から降ってきたパンであり。これを食べる者は死なない。」(6:48~50)と言われて、自分こそが天からのパンであって、この私を食べるように言われます。さらにもっとはっきりと「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。…私の肉はまことの食べ物、私の血はまことの飲み物だからである。」(6:53~55)と言われました。これはどう読んでも聖餐式のキリストの聖体、聖血を象徴しています。聖餐を通して私たちはキリストを食べるのです。旧約時代に天から降ってきたマナは実は、イエス・キリストのひな型であったことが分かるのです。

③【信仰も天からの命も一日しかもたない】

そうすると、マナに起こった特徴も、同じようにイエス様に当てはまるのではないのでしょうか。イエス様は「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタイ 4:4)と言われましたから、キリストの言葉も食べ物という事になります。そしてキリストの肉と血である聖餐も食べ物になります。この二つを通してキリストの命が私たちの中に入ってきます。そこで次の事が分かるのです。

《第一に》、マナはそれぞれが必要な分を集めたといいます。神の言葉は、多く読んでも、少なくしか読めなくても、その人にとって必要な言葉が必ず与えられるということです。よく説教の後に「今日の説教は、私に対して言われているようだった。今の私にぴったりだった」という声を聞くことがあります。その人の今の悩み、心の状態を私があらかじめ知ることはできません。でも、求める人には必ず神様は必要な言葉を下さるということです。

《第二に》、毎日、神の言葉を聞くこと。それも午前中に聞かなければならないということです。マナは昼までに溶けてしまいました。午前中ということは、活動をはめる前に、まず聖書を読みなさいという事でしょう。また聖餐についても、昔の人は日曜日の朝は、何も食べないで教会に来ました。聖餐の前には断食をしなければならなかったのです。朝食の事を「ブレイクファースト」と言います。ブレイクは「破る」、ファーストは「断食」です。だから朝食というのは断食破りという意味なのです。その日に食べるものがまず聖餐であることが望ましいということです。これを忠実に実行しているのが修道女や修道僧たちです。

《第三に》、天の命というものは、一日しか私たちの中に入れないということです。マナは次の日までとっておいたら虫が付き、臭くなっていました。だからマナは毎日、集めに行かなければならなかったのです。信仰はその日しかもたないということです。神の命、天的なものというのは、朽ちる地上の肉体の中には長くと

どまることができないのだと思います。聖書にも「わたしの霊は人の中に永久にとどまるべきではない。人は肉にすぎないのだから。」(創世記6:3)とありますし、聖パウロも「朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。」(I コリント15:50)と書いています。そこで初代教会では毎日聖餐式をしていました。「毎日ひたすら心を合わせて神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き…」(使徒2:46) 聖餐のパンも本当は、その日しかもたないのだと思います。礼拝の中でいただいた聖餐のパンと、家に帰ってからいただく聖パンとでは、効果が全然違います。やはり礼拝の中でいただく聖餐が本当に力になり、目を開かせてくれます。ただマナを壺に入れて、主の前に置き、代々に蓄えた(16:33)ので、そこから保存聖体というものが生まれたのだと思います。カトリックでも正教会でも聖櫃に聖パンが納められています。

●イエス様は弟子たちに「もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって『ここからあそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。」(マタイ17:20)と言われました。弟子たちにはからし種一粒ほどの信仰も無い！といわれたのです。しかし弟子たちは自分には立派な信仰があると思っていました。私たちも自分には信仰があると思っていないのでしょうか。信仰とキリスト教知識は違います。知識はあるので「ああこの話は聞いた、知っている」となりますが、キリストを信じる力はありません。信じる力はすぐに無くなります。もって数時間でしよう。2～3日聖書も読まず、祈りもしなければ平気になり、キリストを必要としなくなり信仰はなくなります。信仰は神から来るものなので、日々求め、日々貰い続けなければならないのです。神に向かって礼拝し、祈っている時だけ、つまり神とつながっている時だけ信仰があるのです。

こんなことを書くと、キリスト教信仰って弱いんだと思うかもしれません。でも毎日聖書を読み、神の言葉を聞き、祈りをささげ、聖餐を食べ続けていると、小さいことなんですが、この繰り返しのによって、天のもの、神の命がすーっと早く人間の体の中に入りやすくなるのです。一瞬で聖霊が満ち、心の中に天国ができるようになるのです。これをしない人は、天的なものに肉体が慣れないので、なかなか神の命が入らずに苦労し、やがて閉じてしまうのです。

●聖路加国際病院名誉院長であった日野原重明先生がこんなことを書いています。「人生はひと言で言えば習慣です。アリストテレスは、習慣とは繰り返された運動であり、習慣が人間の性格や品性をつくると言っています。習慣に早くから配慮した者は、おそらく人生の実りも大きく、習慣をあなどった者の人生はむなしいものに終わってしまいます。」

時間のあるうちに、キリスト教生活を確かなものにしましょう。天のものを招き寄せ、天と地の回路をつくり、神的なものに慣れるように準備をしたいと思います。